

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲口 乙口 口修	第 383 号	氏名	前田 直樹
審査委員	主査 市川 哲雄 副査 松香 芳三 副査 誉田 栄一			

題 目

顎関節症患者のMR画像による閉口位と開口位の関節円板形態分析

要 旨

顎関節症患者における関節円板の位置や形態の異常を診断する目的でMRI検査が広く行われている。関節円板の形態に関してはMR画像で関節円板の形態を分類した報告が見られるが、MR画像で観察される円板形態を閉口位と開口位に分け、それらの形態変化を分析した研究はほとんどない。本研究は、閉口位と開口位との間の関節円板の形態変化に着目し、他のMRI所見や臨床所見との関係を明らかにすることを目的とした。

顎関節部MRI検査を行った302症例を対象として、MR画像上での閉口位と開口位の円板形態を6種類 (biconvex, biconcave, even thickness, enlargement of posterior band, 2種類のfolding) に分類した。foldingは円板が屈曲する方向により、さらに2種類 (上に凸と下に凸) に分類した。閉口位と比較して開口位に形態が変化しないもの (形態変化無し)、他の形態へ変化したもの (形態変化有り)、前後に圧縮変形したもの (圧縮変形) の3タイプに分類し、他のMRI所見、臨床所見との相互の関連を検討した。その結果、“形態変化有り” は全体の8%、“圧縮変形” は29%であった。“形態変化有り” の症例では、閉口位にbiconcaveで開口位にはfoldingへと変化したものが47%と最も多かった。MRI所見との関連では、“形態変化有り” と“圧縮変形” は、“形態変化無し” と比較してjoint effusionの割合が多かった。“圧縮変形” は検査時の開口量が少なかった。“形態変化無し” は関節窩が深い傾向にあった。臨床症状との関係では、クレピタスのみ有意差が認められ、“圧縮変形” で最も多かった。foldingの方向を比較した場合は、復位性円板転位は“下に凸”の方に多く認められた。joint effusionは“上に凸”と“下に凸”ともに他の円板形態に比べて高頻度に認められたが、“下に凸”ではほぼ全例が上関節腔のeffusionであるのに対し、“上に凸”では上・下関節腔にeffusionが認められた。

本研究から、閉口位と開口位との間の円板形態変化と、他のMRI所見や臨床所見との間には関連性が認められ、顎関節症の病態把握や予後予測における1つの指標となる可能性が示唆された。またfoldingは上方に凸の形態と下方に凸の形態の間では、その病態に差異があることが示された。

以上の研究結果から、本研究は歯科医学の発展に大いに寄与するものであり、本論文は博士(歯学)の学位授与に値すると判定した。